

に臨めり。英亦其素志を變せず、疑惑と嫉妬の眼を以て絶へず其運動を監視するを以て、目今の有様にては魯の此目的は實に困難なるものと云はざるを得ず。されば魯が黒海よりする目的は、クリミヤ戦争に因て一挫折を受けたりと謂つ可し。是に於て彼は彼得遺言書に所謂第二策をとれり、故に彼は中央亞細亞に西比利亞東南岸に着々歩を進めて南漸の素懷をとげんとせり、此等は皆英國の利益と衝突するものあり。されば此兩國が今後益々其衝突を高め、遂に干戈に訴へて曲直を決するに至るべきは明かある事實とす。而して其争地は今日已み歐洲中に見出す能はざれば、必ず之を亞細亞に於て求めざるべからず、彼等か亞細亞に於て決戰の地を求むるの時則ち我日本が間に立ちて覇權を握るの時あり矣。

(完)

劍道に就て

擊劍部委員

下山 陸 治

國にして元氣なければ國もさなり。人にして元氣なければ人もさなり。而して元氣の消長に伴ふものは尙武の氣風あり。されば、尙武の氣風如何は、國家の安危に關すること、實に大なりと謂べし。

龍山の麓、白水の溜、讀書の聲松籟水聲と相和する處、時よ千軍鼓噪劍戟相摩し、風噪ぎ浪荒るゝの觀を爲すものあり。此を吾擊劍部の練習場とす。安に處して危を忘れず。常よ凜々たる心膽を藏め、鐵石の体軀を備ふるを以て丈夫の本領とし、勉學の餘暇、劍を練り武を講ず。此尙武の氣風、鬱積して始めて此部を成す所以にして、此部の盛衰如何は、亦以て吾校元氣の振と不振とを卜するものと謂べし。今や吾部日一日に盛大とあり、少くもあらぬ器具さへ、常に不足がらにて、爲に委員をして其周旋に際あからしむ。是れ實に前委員諸君の獎勵、其宜しきを得たるに由ると雖も、抑も亦吾校の元氣、大

に振興せるの結果にして、獨り本校の爲のみならず、國家の爲に大に慶賀すべきことにあらずや。夫れ事を學ぶ、必ず先づ其道に依らざるべからず。其道に依らずして之を學ぶ、徒に勞して益なきのみ。余今余が常に愛讀する宮本武藏の兵法書に就き、劍道指南の最も卑近にして、且其の適切あるものを抄録し、敢て本誌の餘白を借る。若し部員諸君の爲に、寸毫たも裨益する所あらば、余が幸實に之に過ぎず。

書中「兵法」とは、吾人の所謂劍道を指して稱せるものあり。曰く「此道に於て太刀を振得たる者を兵法者と世に云傳たり」又曰く「太刀の徳よりして代を治め身を修る事あれば太刀は兵法の起る所あり云々」劍道を指して兵法と云ふ、旨義高遠、大に味ありと謂べし。

一、兵法心持の事 兵法の道に於て、心の持様は常の心に替ることなかれ、常にも兵法の時にも少しも替らずして、心を廣く直にして強くひつばらず少もたるまらず、心の片寄らぬ様に心を真中に置いて、心を靜にゆるがせて其ゆるぎのせつをもゆるぎ止め様よ能々吟味すべし。靜成時も心は靜ならず、何と早き時も心は少も早からず、心は体に連ず体は心に連ず、心に用心して身には用心をせず、心のたらぬことなくして心を少もあまらさず、上の心を弱くとも底の心を強く、心を人に見分られぬ様にして小身成者は大き成事を殘らずしり、大身ある者は小き事を能くつて、大身も小身も心を直にして、我身の脊負をせざる様に心を持事肝要あり云々。

一、兵法身形の事 身の掛り顔はうつむかずあをのろすかたむろすひつます、目を見出さず額に皺を寄す、眉の間に皺を寄せて目の玉不動様にして、また、まきをせぬ様思て目をすくめる様に去て、うらやかに見る顔鼻筋直にしてれどがひを出す心あり。首は後の筋を直にうあしに力を入れて肩より物

身は等く覺へ、兩の肩を下げ脊骨をろくに尻を不出、膝より足先迄力を入れて腰のうごまざる様に、腹を張てくさびを扱ふと云て、脇差の鞘に腹を持たせて帯のくつろがざる様にくさびを扱ると云教あり。すべて兵法の身に於て、常の身を兵法の身とし兵法の身を常の身とする事肝要あり、能々吟味すべし。

一、兵法の目附と云事 目の付様は大に廣く付る目なり、觀見二つの事、觀の目強く見の目弱く、遠き所を見て近く見近き所を遠く見る事兵法の事也。敵の太刀を知り、いさゝか敵の太刀を不見と云ふ事、兵法の大事あり云々。

一、太刀の持様の事 太刀の取様は、大指人指指を浮る心に持、長高指は、扱すゆるめず、くすま指小指を扱る心にして持あり。手の中くつろぎの有事惡し。太刀を持と云て持たる斗にてと惡く、敵を切もの也と思ひて太刀を取べし、敵を切時に手の内に替りなく手のすくまざる様に持べし、若敵の太刀を振る事受る事當る事押ゆる事有とも、大指人指指斗りを少し替る心にして兎も角も切と思ひて太刀を取べし。様物など切時の手の内も兵法にまて切時の手の内に人を切といふ手の内替る事あり。物て太刀にても手にても居付と云事を嫌ふ、居付は死る手なり、いつかざるは活る手の内なり、能々吟味して心得べきことあり。

一、足つかひの事 足の運び様の事、爪先を少受て踵を強く踏べし、足づかひは所によりて大小遲速はあれども、常にあゆむが如し、足に飛足浮足踏居る足として是三つ嫌ふ足也、此道の大事と曰、陰陽の足と云ふ是肝心なり、陰陽の足とて片足斗動さぬものあり、切時引時受る時迄も陰陽とて左右くと踏足あり、返すも片足踏事有べからず。能々吟味すべきものあり。

一、太刀の道といふ事 太刀の道を知と云は、常に我指刀を指二つにて振時も道筋よく知りては自由振心あり。太刀を早く振らんとするに依て、太刀の道さかひて振がたし、太刀は振よき程に静に振心あり、或は扇或は小刀など仕ふ様に早く振んと思ふに依て、太刀の道違て振難し。夫は小刀割と云て太刀よては人の切ざるものあり、太刀を打下けては上げ能道へ揚、横に振ては横に戻り能道へ戻し、さかにも大きに臂を延て振事、是太刀の道あり云々。

一、敵を打に、一柏子の事 敵を打柏子に一柏子と云て、敵我あたる程の位を得て敵の弁へぬ内を心に得て我身を動さず心も付す、如何にも早く直に打柏子あり。敵の太刀引ん廻さんうたんと思ふ心の無き内を打柏子は一柏子也此柏子能習得て、間の拍子を早く打事深く鍛錬すべし。

一、無念無想の事と云ふ事 敵も打出さんとし我も打出さんと思ふ時、身も打身にあり心も打心に成て、手はいつとなく空より浮み早く強く打事、は無念無想の打とて一大事の打なり。此打度々打出打あり、能々習得て鍛錬有べき儀あり。

一、石火の當と云ふ事 石火の當りは、敵の太刀と我太刀付合程にて、我太刀少もあげつまていかに強く打事あり。是は足も強く身も強く手も強く三所を以て早く打べきあり。此打度々打習はずして打難し、鍛錬すれば強くわたるものあり。

一、紅葉の打と云事 紅葉の打敵の太刀を打落し太刀取放す心也、敵前に太刀を構へ打出し張ん受んと思ふ時、我打思は無念無想の打又石火の打にても、敵の太刀を強く打其儘あとをねばる心にて切先下り又打は、敵の太刀必落るもの也。此打鍛錬すまば打落す事安し、能々稽古あるへし。

一、漆膠の身と云事 漆膠と云は、人身によく附て離れぬ心なり、敵の身に入時頭をもつけ身をもつ

け足をもつく強く付處也、人おとに顔足は早く入ども身ののくものなり、敵の身に我身をつけ、少も身の間の無き様に付ものなり、能々吟味あるへし。

一、粘を掛ると云ふこと、敵も打掛我も太刀打掛るに、敵受る時我太刀敵に太刀に付てねばる心にして入かり、強みなき心に入べし。敵の太刀に付てねばりをかけ入時、いかほど静に入ても苦しからず、ねばると云ふ事ともつるゝと云ふ事、粘るは強しもつるゝは弱き、能々可有分別、

一、身の當と云ふ事、身の當りは、敵のさへ入込みて、身にて敵に當る心あり、我貌をそはめ我左の肩を出し敵の胸に當る也、當る事我身をいか程も強くあり、當る事息合拍子にてはずむ心にて入べし。此入事習得ては敵二間も三間もはけのく程強きものあり、敵死よ入程も當るあり、能々鍛鍊あるへし。

一、場の次第と云ふ事、場の位を見分る所に於て、日をおふと云事有、日を後にあして構る也、若所により日を後にあることならざる時は、右の脇に日をおすやうよすべし。座敷などにもあかりを後右脇とあすこと肝要あり、後に場つまらざる様に左の場をあげ、右の又さの場を詰て構たき事なり、夜とても敵の見ゆる所にては火を後におひあかりを右脇にする事同前と心得構べき者あり。敵を見下すと云て少も高き所に構る様よ心得べし云々。

一、三ツの先と云事、二ツの先、一つは我方より敵の方へ懸る先懸の先と云也、又一つは敵より我方へ懸る時の先待の先と云也、又一つは我も懸り敵も懸りあふ時の先体の先と云ふ、是二ツの先あり、何れの戦初にも此三ツの先より外はあし、先の次第を以て早勝事を得るものあれば、先と云ふ事兵法の第一也云々。

一、三ツの聲と云ふ事 三ツの聲とは、初中後の聲と云て三つに掛分る事也。所により聲を掛ると云事專なり、聲は勢あるに依りて、火事などにも掛風波にも掛聲は勢力を見するあり、(中略)敵を動かさん爲打と見せて頭よりゑひと聲を掛、聲のあとより太刀を打出すもの也。又敵を打てあとに聲を掛ること勝をしらする聲也、是を先後の聲と云ふ、太刀と一度に大きに聲を掛ることあし、若勝負の中に掛るは、拍子にのる聲ひさく掛るなり、能々吟味あるべし。

以上載するところ、最日常の稽古に適切なることのみにて、勿論流派に應じ、各多少其趣を異にし、名稱等も亦異あれども、概して大同小異、一般に通すと思ふことのみを摘出せり。猶進んで其太刀の長短を論ずる章に於て、長さを撰を駁して曰く、

(上略)太刀の長さを徳として、敵合遠き所より勝度と思ふに依て、長き太刀を好む心有べし、世の中に云一寸手増りどて、兵法知らぬものゝ沙汰なり。然るに依て兵法の理あくして、太刀の長さを以て遠く打んとする夫は心の弱き所以に依て弱き兵法と見立る也。若敵合近く組合程の時は、太刀の長き程打事も利す、太刀も通り少く太刀を荷にして小脇差手振の人よ劣るもの也。長き太刀好む身よしては、其云わけの有ものあれども、夫は其身獨の理屈なり云々。

又其短さを撰むものを駁えて曰く、

(上略)短太刀を以て人の振太刀の透間切らん飛入らん穿かんあど、思ふ心片つきて悪し、又透間を覗所萬事後手に見へもつるゝと云心ありて嫌事也。

又構の事を論ずる章に至り、

(上略)世の中に構のあらん事は、敵の無時は事なるべし、(中略)物事に構と云事はゆるがぬ所を用る

心あり、或は城を構へ或は陣を構るまどは、人に仕掛られても強く動かぬ心是常の儀也。兵法勝負に於ては何事も先手くくと心懸る事あり、構ると云は先手を待心あり、能々工夫あるべし。

又目附の事を論じて曰く、

(上略)流々により敵の太刀に目を付るもあり、又は手に目を付る流もあり、或は顔に目を付或は足おきに目を付るも有。其如く取分て目を付んとしては紛るゝ心ありて兵法の病と云ものも成也。其子細は鞠を蹴る人は、まゝよりはよく目を付されども、ひんすりを蹴追鞠押流しても蹴迫りてもける事物に馴るゝと云所あれば、慥に目に見るに不及、(中略)兵法の目附は大かた其人の心に付たる眼あり。大方の兵法に至ては其敵の人数の位に付たる眼也云々。

此等の言、皆最も卑近なる所なりと雖も、深く之を考察すれば、流石に双刀の術を以て、鬼神をも驚かゝ英雄の見識とて、其内無限の味あるを覺ふ。況むや一旦之を習得し、能く入神の妙を得ば、其用を致すこと果して如何ぞや。聞く此書一時大に世よ行はれたりと、會員諸君或之嘗て之を繕られたるもあるべし、唯希くば余が微衷を察し、徒らに貴重なる誌上を汚すの罪を尤むる勿れ。

五日間の旅

(續)

講師 田中玄黄

此日瀛車の通過せし地は、平原一望限界なく、恰も太平洋上を航する思あらしむ。午後十時半ウイニヒツグ Wentzig に着し、瀛車の乗換をなし、午後十一時瀛車は幾多の夢を載せて、鈴聲囂しく進行を始めたり。十四日拂曉、頗に寒冷を感じ、車内已に暖爐を以て暖を取れり。瀛窓は外面已に薄氷を結ひ、朦朧として透見する能はず、車掌曰く落巖山脉に入るは午前十時あり、故に寒氣増加せりと。